



『スパークス 日本株長期投資のすすめ』

スパークスの株式投資、株式市場などに対する見方を紹介するコラムです。

第51号(2009年7月10日)

「日本発ボーン・グローバル企業」

ボーン・グローバル企業とは、設立と同時にグローバル市場でのシェア獲得を目指す企業のことをさしますが、日本企業においては他の主要国と比較してもその数は少ないといわれています。その要因としての何点かの要因が挙げられると考えられます。

第一に日本経済の規模が非常に大きく、会社創業時においては国内市場で十分に利益を上げることが可能で、あえて海外市場に進出する必要が無いことがあると考えられます。

例えばフィンランドの携帯電話メーカーであるノキアは代表的なボーン・グローバル企業といわれていますが、フィンランドの2009年の国内総生産(GDP)は国際通貨基金(IMF)の予想によると2,335億ドルと非常に小さく、国内だけで事業を行なおうとしても採算が合わず、会社創業時から世界市場を意識した経営を行なわざるをえなかったと考えられます。

一方で日本の2009年のGDP予想は4兆9,928億ドルと世界第二位の規模を持つ経済大国であり、国内だけでも十分に採算が取れる規模があります。その結果として携帯電話市場に複数のメーカーが日本独自仕様で商品を開発し続け「ガラパゴス携帯」などと呼ばれる状態に陥ったことになり、逆に国際競争力を失ってしまったという皮肉な例もあります。この十分に大きな国内市場こそがボーン・グローバル企業が日本において少ない最大の要因と考えられます。

第二の要因としては日本における独自の規制の存在があげられます。欧米と比較すると日本の規制、会計、税制等は複雑であり、海外進出にあたり国内仕様とは違う製品の開発、新たなビジネスモデルの作成が求められるケースが多く存在すると考えられます。一方で規制が緩和されており、世界基準の制度が整備されているアメリカで、ボーン・グローバル企業が多く排出されているのはこの点が大きく寄与しているのではないのでしょうか。

しかし、日本経済が成熟した今日においては、国内市場だけで成長を続けるのは今後ますます難しくなっていくことが予想されます。現在日本企業は国内である程度の地盤を築いた大企業が海外を目指す傾向が高かったといえますが、このような環境下で今後は会社創業時から世界市場を視野に入れたボーン・グローバル企業の誕生や、元々日本国内だけで事業展開を行ってきた内需産業の海外進出も盛んになると考えられます。

(注) 本コラムは、マネックス証券Web-Site「マネックスラウンジ」の「マネックスメール」に掲載されている「スパークス・アセット・マネジメントの『SPARX Way』」をもとにスパークスが作成したものであります。また、上記は株式投資に関して理解を深めていただくためのものであり、特定の有価証券を推奨しているものではありません。



本資料は、スパークス・アセット・マネジメントが情報提供のみを目的として作成したものであり、金融商品取引法に基づく開示書類ではありません。また特定の有価証券の取引を勧誘する目的で提供されるものではありません。スパークス・アセット・マネジメントとその関連会社は、本資料に含まれた数値、情報、意見、その他の記述の正確性、完全性、妥当性等を保証するものではなく、当該数値、情報、意見、その他の記述を使用した、またはこれらに依拠したことに基づく損害、損失または結果についてもなんら補償するものではありません。ここに記載された内容は、資料作成時点のものであり、今後予告することなしに変更されることもあります。また、過去の実績に関する数値等は、将来の結果をお約束するものではありません。この資料の著作権はスパークス・アセット・マネジメントに属し、その目的を問わず書面による承諾を得ることなく引用または複製することを禁じます。